

学習形態 新型コロナウイルス非常事態のためネット上で講義。自学。

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ（5）

皆さんで、いろいろ座談されたようですが、その中で、頓教・漸教の問題、それを顕彰をもって考えていこうとされているのは、面白いと思いました。そして、それを我々の感覚・感性で捉えようとするとき、三性説が出てきたわけですね。私にはとてもこれに応えることはできないし、簡単に終わらせられる問題でもないのです、私達で共に抱えながら学んでいきたいと思えます。（場を共にできれば、もっと楽しかったんだろうと思えますが。）

前回は、課題 4 2 で「双樹林下往生」から「難思往生」への意識的転回を問題にしたところまでお話ししました。

第 19 願「双樹林下往生」は発願して諸行を行じて往生する、ということですが、この問題性は「諸行を行じる」という事の「雑」性でした。それを「雑毒の善」と言ったり「解行不同」と言ったりしてきたわけですが、それをどう意識してきたのか、という事も申しあげました。

それは、諸行を行じて往生しようとしても、臨終の時（双樹林下）まで往生できないのだ、というわけです。何故かと言えば、それは「雑行」だからですね。いろんな行を行じなければ往生できないわけです。その往生は最後に定まるわけですね。でも正しく定まるのではない、いろんな行が混じって定まる。だから邪定聚というのではないかと思うわけです。

それで「雑行を棄てる」という展開に進むわけです。雑行を棄てて「この事一つ」を選び取ると。言ってしまうと「雑行を棄てて本願に帰す」というわけです。本来は「本願に帰す」ということなんだけれど、「雑行」という言葉に対比させるならば、「正行」あるいは「一行」となるべきであろう。それを、「雑行」に対して「本願に帰す」と言ったところに重要な問題が示されていると考えます。

ともかく、「本願に帰す」ことの具体的姿というのは、雑行ではなく「一行」だという事になるわけですが、そうすると 20 願の課題になっていくわけです。p 340 に『小本』について「一心と言えるなり。二行雑わることなきがゆえに一と言えるなり」と言われていますね。念仏一つ、という事でいいわけですが、親鸞聖人はこの念仏、一心、一行そのことに問題を見出すわけであります。

もっと言えば、「雑行を棄てて本願に帰す」ということでいえば、念仏一つが 18 願になるはずですが、「本願」を「正行」あるいは「一行」と置き換えた時、それが 20 願に説かれる意味を見出されたのではないかと思うのであります。

今回は、その続きを聖典に依りながら、学んでいきたいと思ひます。

課題 4 3 『化身土』において『観経』について述べられている範疇はどこまでか。

そもそも、この「化身土」の始まりは、最初に「仏は観経の説のごとし、・・・土は観経の浄土これなり」というところから始まります。そして、これまで学んできた内容が展開してまいります。それがどこまで続くか、と言え、科文に依りますと、(p 1006) p 346 の中ほど、「三経一心の義、答え竟りぬ」というところまでになっています。

しかし、p 344 の「また問う。大本と観経の三心と小本の一心と一異いかんぞ」という問いを出しています。(それまでに『信巻』でも、「三・一問答」が取り上げられてきましたが)、ここで『小経』の「一心」が取り上げられてきます。しかも『観経』の課題として取り上げられているわけです。それはなぜか。

それは、『三経』を通して、方便を明らかにするのは『観経』であるという事を意味しているわけです。その一文は p 339 「三経の眞実は、選択本願を宗とする。また三経の方便は、もろもろの善根を修するを要とする」というところにあります。つまり選択本願と諸修善根の二つを並べ、これを基本として、論を展開しているのではないかと思ひます。

すなわち、(p 339-14) ここでは往生についても「双樹林下往生」と「報土化生」の二つだけ述べられ、ここでは「難思往生」は述べられてきません。これは注意して考えなければなりません。

要するに、双樹林下往生を棄てて眞実報土へ至る、という方向だけを示しているわけです。本来はそれが本筋です。ね。

それではどこから、宗祖は「難思往生」が気になってきたのか、それがここの御自釈の意味ではないかと思われるわけです。それでここの御自釈を少し丁寧にみていこうと思ひます。

課題 4 4 p 339 に『小本』には、ただ眞門を開きて方便の善なし」といわれながら、続いて「三経の方便は、・・・」といい、また p 345 には「これすなわち眞門の中の方便なり」と述べられています。これらの事をどう考えるか。

前回、19 願においては、「顕彰隠密」の課題でした。それで次に (p 338-9) においては「眞実・方便」の課題が述べられていきます。

まず『大本』では「眞実(と)方便の願を超発す」と述べられ、それは暗に 18 願は眞実、19 願・20 願は方便、という事を述べているわけです。

次に『観経』では「方便(と)眞実の教を顕彰す」と、眞実と方便を逆に使って述

べていますね。これは「顕彰」に充当させているのではないかと考えられます。つまり方便は「顕」真実は「彰」ということを意味しているのではないかと思うわけです。それは前回触れましたので、また振り返っていただければ、と思います。

そして『小本』では「ただ真門を開いて方便の善なし」とあります。これはあくまで『小本』という経について述べているわけですね。要するに『小経』にあります「難信之法」ですね。難信の法ですから方便ではありませんね。でもその『小経』に本願（20願）を当てて考える時方便が生まれてくるわけです。

それで「三経の方便はすなわちもろもろの善根を修するを要とするなり」と述べられてきます。しかし我々にとっては、「難信の法」ですから手も足も出ないわけです。真実である「選択本願」は一切衆生を救済するわけですから、私達は手を拱いて何もせずとも救われるわけですね。でも「善根を修する」ことが必要である、という事でしょう。何もしないでも救われるのですから、何もしないでいけばいいか、ということでは宗教が成り立ちません。方便として「善根を修する」という事を必要とするわけです。

そういう事で、いうなれば『小経』20願は「雑行を棄てて一行を選び取る」というありかたを示しているわけです。その意味を探るために、ここの御自釈を（科文があるので見ていただければいいわけですが）私なりに要約してみたいと思います。

別考 科文 六節三経通顕（真仮分判）を私考する

○ p 339-3 「三経の方便は・・・もろもろの善根を修するを要とする」

この部分は先に述べたとおりですね。

○ p 339-5 「方便の願を案ずるに、仮あり真あり」

この方便の願というのは19願と20願ですね。それで、ここで「真あり仮あり」（通常は真仮と言われる）と言わず、逆に「仮あり真あり」と述べられています。そこに宗祖の意図が感じられます。即ち順番を当てはめれば、19願は仮であり20願は真である、という事を示しているように思われます。

○ p 339-6 「願は、臨終現前の願・・・行は、修諸功德の善・・・信は、至心発願欲生の心」（と述べられ、そして）「この願の行信に依って、浄土の要門、方便権仮を顕開す」

ここでは、真門に対して要門を明かしているわけです。これは言うまでもなく、『小経』の真門に対して、『観経』の要門という事ですね。そしてこの要門から、まず三行を出だし、二種の機を示し、二種の三心を言い、二種の往生をあらわしてくるわけです。科文では「要門の教行信証」と記しております。ここで「二種」述べられるのは前回申し上げました「顕・彰」のことになるわけです。

○ p 339-16 「またこの経に真実あり・・・。報土の真因は信樂を正とする。」

ここの「この経」とは何を指すのか。『大経』ばかりと思いがちですが、後を読んでもみると、「信樂」「深心」「一心」と出てきますので、三経と見るのが妥当ではないかと思われます。本来は『大経』のことでしょうけど、前の「顕・彰」の論理によって「彰」

で言えば三経ともいえるわけです。

○ p 340-9 「宗師の意に依る・・・空に居て舎を立てんがごとし、と言えり。」

ここは言うまでもなく、善導は「解脱を蒙れり」と教えているが、常没の凡愚である我々には、それは不可能である、と述べている文章ですね。ここで「心に依って勝行を起こせり」と言われていますが、私たちの心情を、「立相住心」と「無相無念」で示され、我々常没の凡愚には成しがたいと述べています。これを言うならば、前者は（きちんと計画を立ててその通りに実践していく事）。後者は（何も考えず、ただ無心にながむしゃらに突っ走る事）というような行動を示していると思います。ですから、如来様は「きちんと計画を立てて実践しても得ることはかなわないのだから、がむしゃらにしても空中に家を建てるようなものだ」と述べられているわけです。

○ p 341-4 「門余と言うは、・・・」

この部分については、前回も取り上げましたが、私達の真宗の認識において重要な箇所であることは申し上げたかと思えます。繰り返しになりますが、「門」と「余」を分けて述べられていますが、この二つを分けて対等に比較するならば、門と（その）他という表現の方が的確であるはずですが、原文は「勝行を起こせり、門八万四千に余る」という表現になっていますが、この文章をどう読むか、そしてこの「余る」を現代文にすれば、どう表現するか。

それによって、「余」である本願一乗海のニュアンス、イメージが獲得できるのではないか、と考えているのですが・・・。少なくとも、八万四千の法門に対する別の法ではない、八万四千に余る法門であるということです。ここに先ほどの「雑行を棄てて一行に帰す」ではなく「本願に帰す」という事の意味が含まれているような気がしております。

この「門余」ということを、もっと皆さんと語り合い、探り合っていきたいと思えます。

○ p 341-5 「おおよそ一代の教について・・・すでに真実行の中に顕わし竟りぬ」

ここでは、仏教全体の事が述べられ、そして「横超」ということで「自力の心を離れる」と抑えられています。これは言うまでもなく「門余」の事でしょう。「これすなわち真宗なり」と結ばれます。ここまでは『観経』の要門から『大経』の弘願門へという方向になっていますね。

○ 「それ雑行・雑修、その言葉一にして・・・三心一異の義、答え竟りぬ」

ここでは「雑」にまつわる「行」や「心」や「修」に関する分類を述べ、それらはすべて（p 343 - 14）「辺地・胎宮・懈怠界の業因なり」というところに導いていくわけです。

もう少し集約すれば、「(p 343 - 11) 経家に抛りて師積を披くに、」から、「雑行の中」と「正行の中」における「専」と「雑」の内容を総括し、そして「正行の中」の「専修専心」のものまで皆、辺地・胎宮・懈怠界の業因である、と抑え、「余の雑業の行者」、

つまりその他(=雑行)は仏心の光明に照らされることはない、と結ばれています。

ここまで読んできて、一つ疑問になることは、「正行」だけは「横超他力」即ち「真実の行」だと思っていたのですが、「正行の中の」専修専心・専修雑心・雑修雑心は皆辺地懈慢界だというわけですね。

そうすると「正行の中」にもう一つ別のものがあるのか、ですね。あるとすれば、それは何なのか。私たちは、(少なくとも私は)正行の専修専心を真実の行だと思っていたわけです。でもそれらは「皆」辺地懈慢界の業因である、といわれるわけです。この辺をどう了解するのか。

そういたしますと、結論として、次に述べられてくる(p 345 - 2)「真門の中の方便」を意味しているのではないかと思わされてくるのであります。そしてその根拠は何かと言えば、「三宝を見たとまつらず」という一点にあります。

なんかおかしな話になりましたが、その意味を申し上げますと、仏道の初めは「善行を修すること」が必要である、というところから出発して、臨終まで成就することはないけれども、臨終時に辺地懈慢界に往生する、というわけです。しかしそれは「仮令」であるといわれるわけですね。「仮令」とは「かりに」ということです。ですからそれが目的ではないという事でしょう。第19願の願文では「臨終時に大衆と共に法蔵菩薩に出会う」と言われているが、実際は辺地懈慢界であるから、誰にも会う事はないわけです。ここに願文と相違する状況となるわけですね。実は、この相違が大事なんです。相違しているという事は言ってしまうと、19願は成就しない、という事を意味します。「だから仮令(19願)の誓願は本当に存在の意味があるのです」と述べられるわけです。つまり修諸功德では真の往生は出来ないと言うことを自覚せしめるためには大きな存在意味があるのだ、と言うことでしょう。

この第19願の成就文というのは、「三輩の文」あるいは「定散九品の文」と言われるわけです。これは衆生に差が出るという事です。差が出るという事は、その行が意味を持たない、という事を物語るわけです。ですから善行無効という事を自覚することが19願の意味ですね。

(p 342 - 6)を見て頂きますと(「雑」は)「本より往生の因種にあらず、回心回向の善なり、故に浄土の雑行というなり」と述べられていますね。これはすごい言葉じゃないですか。「自分の諸行を自分でひっくり返せ」と浄土が叫んでいるんだ、という事です。もっと言うなら、20願の叫びです。

この辺から、邪定聚から不定聚への転機が述べられていくわけであります。

今回はこれぐらいにしておきましょう。次は、(p 344 - 4)「」また問う、・・・」から(p 347 - 10)「至心回向の願と名づくべきなり」までを学んでいきたいと思えます。

ここで注目すべき点は、(p 345 - 15)「四依弘経の大士」です。これは、前の「三宝を見たとまつらず」からの展開してくる言葉になります。

